野菜畑作生産情報　第５号

令　和　元　年　８　月　２　０　日
青森県「攻めの農林水産業」推進本部

◎大豆の生育は平年並からやや下回っています。紫斑病やマメシンクイガの防除を徹底しましょう！
◎ながいも等の野菜の生育はおおむね順調です。品目やほ場に応じて病害虫防除と排水対策を徹底しましょう！

畑　作　物

１　大　豆

（１）生育状況

ア　生育は、平年並からやや下回っている。
イ　ほ場の乾燥によるしおれ症状が一部地域で散見される。
ウ　べと病とツメクサガなどの幼虫による食害が見られる。

表－１　大豆の生育状況（８月10日調査）

場 所	年　次	は種期（月日）	出芽期（月日）	開花期（月日）	草 丈（cm）	主茎長（cm）	葉 数（枚）	分枝数（本）
農林総合研究所（黒石市）	本　年	5/24	6/5	7/25	91.5	51.7	12.9	3.9
	(平年差・比)	(早1日)	(±0日)	(早2日)	(101%)	(92%)	(96%)	(144%)
	平　年	5/25	6/5	7/27	90.3	55.9	13.4	2.7
	前　年	5/25	6/6	7/27	99.0	65.4	13.5	3.3
野菜研究所（六戸町）	本　年	5/15	5/21	7/25	104.2	57.9	13.1	2.7
	(平年差・比)	(早1日)	(早5日)	(早1日)	(99%)	(88%)	(94%)	(98%)
	平　年	5/16	5/26	7/26	105.0	65.9	14.0	2.7
	前　年	5/15	5/26	7/24	115.8	72.9	14.3	1.8
五所川原市金木町	本　年	6/2	6/10	8/1	74.2	－	－	－
	(平年差・比)	(早1日)	(早2日)	(遅2日)	(89%)	－	－	－
	平　年	6/3	6/12	7/30	83.4	－	－	－
	前　年	6/8	6/17	7/31	72.3	－	－	－
十和田市切田	本　年	6/1	6/8	7/28	78.1	－	－	－
	(平年差・比)	(早6日)	(早7日)	(早7日)	(96%)	－	－	－
	平　年	6/7	6/15	8/4	81.0	－	－	－
	前　年	6/8	6/20	8/1	84.8	－	－	－

（注）品種は「おおすず」で、農林総合研究所、野菜研究所は作況試験ほ、五所川原市、十和田市は生育観測ほのデータ。平年値は、農林総合研究所が過去14年、野菜研究所が同12年、五所川原市が同17年、十和田市が同18年の平均値。
調査日：本年は８月９日。

（２）今後の留意点

ア　紫斑病は、開花期後20～40日の間に防除する。なお、チオファネートメチル剤とベノミル剤に対する耐性菌が発生しているので、薬剤の選択には注意する。

イ　ＱｏＩ剤（アミスター）は耐性菌の発生を回避するため、年１回までの使用とし、他剤と組み合わせて使用する。

ウ　ツメクサガ、ウコンノメイガ等の食葉性害虫の早期発見・早期防除に努める。

エ　マメシンクイガの防除を次により徹底する。

薬剤の種類	散布時期
パーマチオン水和剤、トクチオン乳剤、トレボン乳剤、トレボンMC、トレボンスカイMC、トレボン粉剤ＤＬ、アミスタートレボンＳＥ、アディオン乳剤、アグロスリン乳剤、モスピランＳＬ液剤、モスピラン顆粒水溶剤、プレバソンフロアブル５、ベネビアＯＤ	【一般のほ場】 ８月第６半旬～９月第１半旬に１回散布 【多発しているほ場】 一般ほ場より早めの８月第５半旬に１回目、その７日後に２回目を散布
エルサン乳剤、サイアノックス乳剤、スミチオン乳剤、ダーズバン乳剤40、スミトップM粉剤、スミチオンベルクート粉剤ＤＬ、エルサン粉剤２、ダイアジノン粒剤５	９月第１半旬に１回目、その７日後に２回目を散布

注）登録内容は令和元年８月15日現在。

オ　８月下旬～９月初めに殺虫・殺菌混合剤を使用すると紫斑病とマメシンクイガを同時防除できる。

カ　乾燥しているほ場では、落花や落莢を防ぐため、うね間かん水を行う。

キ　台風や大雨に備え、明きょを手直しして排水溝へ接続するなどの対策を徹底する。

２　小　麦（は種の準備）

（１）は種が早いと生育が進み過ぎて雪腐病の発生を助長し、遅いと越冬前の生育量が不足するので、は種適期である９月15～25日に確実には種ができるようほ場を準備する。

（２）ほ場の団地化を図り、明きょや弾丸暗きょなどで十分な排水対策を行う。

（３）土壌分析を行い、酸度矯正が必要な場合は、苦土石灰等により土壌改良を行う。

（４）紅色雪腐病の保菌種子の持ち込みによる被害を防止するため、薬剤による種子消毒を行う。

野　菜

1　ながいも

（１）生育状況

ア　生育は、地上部は平年並で、地下部はいも重が平年を下回っているものの、おおむね順調である。

イ　葉渋病、ナガイモコガ、アブラムシ類の発生が見られる。

表－２　ながいもの生育状況　（８月10日現在）

場　所	年次	植付期 （月日）	萌芽揃期 （月日）	つる長 （cm）	茎葉重 （ｇ）	つるのネット頂到達日 （月日）	いも長 （cm）	いも重 （ｇ）	いも最大径 （mm）
野　菜 研究所 （六戸町）	本年 (平年比) 平年 前年	5/24 (2日早) 5/26 5/25	6/24 (5日早) 6/29 6/28	379.4 (104%) 365.0 370.2	267.9 (102%) 261.6 236.4	7/22 － － 7/19	31.6 (100%) 31.7 28.7	76.5 (73%) 105.2 84.2	30.9 (93%) 33.3 32.8
五戸町 上市川	本年 (平年比) 平年 前年	5/ 6 (7日早) 5/13 5/12	6/ 9 (6日早) 6/15 6/11	－ (－) － －	－ (－) － －	7/ 8 (±0) 7/ 8 7/ 3	48.0 (106%) 45.1 49.7	118.0 (65%) 182.8 338.3	30.7 (85%) 36.0 44.9
東北町 野田頭	本年 (平年比) 平年 前年	5/ 8 (7日早) 5/15 5/ 6	5/30 (10日早) 6/ 9 6/ 3	－ (－) － －	－ (－) － －	7/22 (11日遅) 7/11 7/10	33.0 (90%) 36.8 43.0	103.0 (77%) 134.1 187.7	34.4 (107%) 32.1 37.8

注）①平年：野菜研は平成19～30年の12か年の平均値。
　　五戸町は平成14～30年の17か年の平均値。
　　東北町は平成20～30年の11か年の平均値。
②種子：野菜研は園試系６の２年子（90～110ｇ）ガンク切除。
　　五戸町は庄司系の２年子（120～150ｇ）頂芽切除。
　　東北町は庄司系の１年子（50～80ｇ）頂芽付。
③栽植様式：野菜研は畦幅120cm×株間24cm（3,472株/10a）。
　　五戸町は畦幅120cm×株間24cm（3,472株/10a）。
　　東北町は畦幅110cm×株間21cm（4,329株/10a）。
④東北町の萌芽揃期は萌芽期の値。
⑤調査日：本年は８月９日。

（２）今後の留意点

ア　８月20日以降の追肥は、茎葉の過繁茂や平いもの発生を助長するおそれがあるため行わない。

イ　葉渋病、炭疽病の防除を徹底するとともに、ナガイモコガ、アブラムシ類などの害虫の早期発見・早期防除に努める。

ウ　採種ほ場では、ウイルス病の伝搬を防ぐためにアブラムシ類の防除を徹底する。

エ　台風など強風や大雨に備え、ネットや支柱を補強し、明きょを手直しして排水溝へ接続するなどの対策を徹底する。

オ　植溝が陥没したときは速やかに埋め戻す。

２　にんにく

（１）ほ場の準備

ア　イモグサレセンチュウなどの病害虫が発生していないほ場を選ぶ。

イ　堆きゅう肥や土壌改良資材は、土壌診断結果に基づいて施用し、必要量以上に投入しない。

ウ　緑肥は、少なくとも植付けの30日前にすき込み、石灰窒素を10ａ当たり40kg施用し、ロータリー耕を３回程度行う。

エ　転作田など排水の悪いほ場では、過湿による病害の多発や生育不良を防ぐため、明きょの設置やサブソイラによる弾丸暗きょなどの排水対策を実施するほか、高うね栽培とする。

（２）種子の準備

ア　イモグサレセンチュウが発生したほ場のりん球は、種球として絶対に使用しない。

イ　ネギアザミウマ、チューリップサビダニの被害を防ぐため、種球の分割・調製はできるだけ植付け直前に行う。

ウ　チューリップサビダニ、イモグサレセンチュウ、黒腐菌核病を対象とした種子消毒を徹底する。

３　夏だいこん

（１）生育状況

ア　生育は、一般ほ場の一部で、高温・乾燥の影響による、黒芯症状や軟腐病の発生が見られているが、おおむね順調である。

表－３　夏だいこんの生育状況（８月10日現在）

場　所	年次	は種期（月日）	葉　長（cm）	葉　数（枚）	根　重（g）
平　川　市 善光寺平	本年 (平年比) 平年 前年	7/ 3 － － 7/ 2	34.6 － － 27.1	18.9 － － 15.3	122 － － 121

注）①H29年から作期を変更したため平年値無し（7月中旬は種→6月下旬は種へ変更）
②品種：夏秋清光（前年は改良盛夏土心）。
③調査日：本年は８月９日。

（２）今後の留意点

ア　生育状況を確認しながら適期に収穫する。

イ　軟腐病、キスジノミハムシの防除を徹底するとともに、コナガ、アオムシなどの害虫の早期発見・早期防除に努める。

４　秋にんじん

（１）生育状況

ア　生育は、出芽が良好で、順調である。
イ　病害虫の発生は見られない。

表－４　秋にんじんの生育状況（８月10日現在）

場　所	年次	は種期（月日）	葉　長（cm）	葉　数（枚）	根　径（mm）	根　重（g）
平　川　市 大木平	本年 (平年比) 平年 前年	6/21 (1日遅) 6/20 6/21	26.5 (112%) 23.7 26.6	6.4 (105%) 6.1 8.1	12.2 (109%) 11.2 14.3	6.7 (95%) 7.1 10.9

注）①平年：平成９年～30年の22か年の平均値。
②品種：向陽２号（前年も同じ）。
③調査日：本年は８月９日。

（２）今後の留意点

ア　黒葉枯病、ヨトウムシなど病害虫の早期発見・早期防除に努める。

５　ご ぼ う

（１）生育状況

ア　生育は、葉数が平年をやや下回っているが、順調である。
イ　黒斑細菌病やアブラムシ類が散見される。

表－５　ごぼうの生育状況（８月10日現在）

場　所	年次	は種期（月日）	草　丈（cm）	葉　数（枚）
三　沢　市 三　沢	本年 (平年比) 平年 前年	5/ 4 (6日遅) 4/28 5/ 4	118.6 (98%) 121.6 113.0	2.5 (86%) 2.9 2.8

注）①平年：平成21～30年の10か年の平均値。
②品種：柳川理想。
③調査日：本年は８月９日。

（２）今後の留意点

ア　黒斑細菌病、黒条病、アブラムシ類等の発生に注意し、防除を徹底する。

６　夏秋トマト

（１）生育状況

ア　生育は、津軽地域の４月下旬～５月上旬定植では、６～７段果房の収穫期、県南地域の５月上旬定植では４～５段果房の収穫期となっており、おおむね順調である。

イ　高温・乾燥の影響で、葉先枯れや落花、尻腐れ果や軟果が見られる。

ウ　灰色かび病、アザミウマ類、タバコガ類の発生が見られる。

表－６　トマトの生育状況　（８月10日現在）

場　所	年次	定植期（月日）	５段花房		７段花房		９段花房	
			開花期（月日）	着果数（個）	開花期（月日）	着果数（個）	開花期（月日）	着果数（個）
五所川原市 藻川	本年 (平年比) 平年 前年	5/ 3 (2日早) 5/ 5 4/29	6/16 (4日早) 6/20 6/13	2.1 (78%) 2.7 3.3	7/ 2 (11日早) 7/13 6/28	3.3 (118%) 2.8 2.5	7/19 (12日早) 7/31 7/18	(－) 2.9 3.0
三戸町 斗内	本年 (平年比) 平年 前年	5/ 7 (9日早) 5/16 5/11	7/ 1 (4日早) 7/ 5 7/ 4	2.6 (96%) 2.7 1.6	7/19 (3日早) 7/22 7/24	3.4 (155%) 2.2 2.5	8/ 9 (2日早) 8/11 8/12	(－) 2.0 1.8

注）①設置場所：五所川原市は、H29年から藻川に変更（前年まで金木）。
②平年：五所川原市は参考値（五所川原市金木の平成16～28年までの13か年の平均）。
平年値は、５段花房の上で心止めし、直下の側枝に更新した作型の値。
三戸町は平成20年～30年の11か年の平均値。
③品種：五所川原市は桃太郎セレクト（台木：Ｂバリア）（前年に同じ）。
三戸町はりんか409（自根）（前年に同じ）。
④調査日：本年は８月９日。

（２）今後の留意点

ア　温度管理等

（ア）肩換気などにより適正な温度管理を徹底する。また、適切なかん水、肥培管理により草勢の維持に努める。

（イ）９月以降は裂果の発生が多くなるので、土壌水分が極端に変化しないように水管理する。

イ　摘　心

（ア）雨よけ栽培では、例年９月５日頃までに開花した花房が収穫できるので、開花直前の花房の上にある葉を２枚を残して摘心する。

ウ　病害虫防除

（ア）灰色かび病、葉かび病、アザミウマ類の防除を徹底するとともに、タバコガ類、コナジラミ類の早期発見・早期防除に努める。

7　ね　ぎ

（１）生育状況

ア　生育は、草丈、茎径とも平年を上回っており、順調である。

イ　病害は、軟腐病や斑点性病害の発生が見られ、虫害は、ハモグリバエやアザミウマ類が散見される。

表－７　ねぎの生育状況（８月10日現在）

場　所	年次	は種期 （月日）	定植期 （月日）	草　丈 （cm）	茎　径 （mm）
十和田市 深沢平	本年 (平年比) 平年 前年	2/ 5 (12日早) 2/17 2/24	4/23 (6日早) 4/29 4/23	100.2 (108%) 93.0 96.5	22.4 (107%) 20.9 25.3

注）①平年：平成17～30年の14か年の平均値。
②品種：夏扇パワー
③調査日：本年は８月９日。

（２）今後の留意点

ア　管　理

（ア）追肥・培土は、生育の進み具合に合わせて適期に行う。なお、培土は、葉の分岐部の下までを目安に行う。

（イ）軟腐病を回避するため、培土は天気の良い日の地温が低い早朝に行う。

（ウ）最終培土は、収穫の30日前頃に行い、葉の分岐部まで丁寧に土を寄せ、軟白長30cm以上を確保する。

（エ）ほ場の停滞水は生育不良の原因となるため、排水対策を徹底する。

イ　病害虫防除

（ア）べと病、軟腐病、さび病、黒斑病､アザミウマ類など病害虫の防除を徹底する。

◎農作業中は熱中症に気をつけましょう。
１　日中の暑い時間帯は作業を避けるとともに休憩をこまめに取る！
２　通気性の良い作業着や帽子を着用し、汗で失われる水分や塩分を十分に補給する！

◎秋の農作業安全運動展開中！（８月１５日～１０月３１日）
１　慣れた作業でも油断せず、注意して行いましょう。
２　必ず、作業の合間に十分な休憩を取りましょう。
３　自分を過信せず、無理のない作業を行いましょう。
４　一人での作業は避け、やむを得ず一人で作業を行う場合は、家族に作業場所を伝え、携帯電話を持ちましょう。
５　家族や周りの人など、地域全体で注意を呼び掛けましょう。

◎農薬は適正に使用しましょう。
１　使用する際は、必ず最新の登録内容を確認しましょう。
【農薬情報】(http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_info/)
【農薬登録情報提供システム】
詳細検索 →（http://www.acis.famic.go.jp/search/vtllp301.jsp）
作物名での検索 →（http://www.acis.famic.go.jp/search/vtllp101.jsp）
２　飛散防止に努め、住宅地等の近隣で使用する際は、事前に周囲に知らせましょう。
３　クロルピクリン剤など土壌くん煙剤を使用する際は、必ず厚さ0.03mm以上又は難透過性の被覆資材で被覆しましょう。
４　市販の除草剤には、農作物等の栽培管理に使用できない「非農耕地専用除草剤」があるので、注意しましょう。
５　農薬は使い切りを徹底し、河川等には絶対に捨ててはいけません。

◎食中毒を防ぐため、生産段階から「野菜の衛生管理」に努めましょう。
１　栽培に使用する水の衛生管理や水質の確保に努めましょう。
２　家畜ふん堆肥は、水分調整や定期的な切り返しを行い、十分発酵させましょう。
家畜ふん中の菌の死滅には、55℃以上の温度が3日以上続いている状態が必要です。
堆肥の製造工程では、この温度条件を確認しましょう。
３　家畜ふん堆肥を野菜栽培に使用する際は、製造工程や熟成度を確認しましょう。確認できない場合には、堆肥施用から収穫までの期間を、土壌から離れた野菜は２か月、土壌に近い野菜は４か月空けましょう。
４　農機具や収穫容器等は清潔な状態を保ち、汚水の流入や野生動物の侵入防止等、栽培環境の整備にも努めましょう。
※ 野菜の衛生管理指針、家畜ふん堆肥の生産・利用の注意点はこちら
→（http://cms.pref.aomori.lg.jp/soshiki/nourin/sanzen/kachikuhunntaihiseizoukannritennminaoshi.html）

◎～農業保険（農業共済及び収入保険）への加入について～
自分にあったセーフティネットに加入し、農業経営に万全の備えを！
１　農業共済
「農業共済」は、自然災害等により農作物・家畜・園芸施設に損害が生じた場合に補償される制度です。
２　農業経営収入保険
令和元年から始まった「農業経営収入保険」は、自然災害に加え、農産物の価格低下などにより販売収入が減少した場合に補償される制度です。加入には、青色申告の実績が条件となっています。
※　詳しくは、お近くの農業共済組合にお問い合わせください。

◎ほ場を見回るなど農作物の盗難防止に努めましょう。

◎決め手は土づくり！　日本一健康な土づくり運動展開中！

連 絡 先　農産園芸課野菜・畑作物振興グループ
県庁内線　５０７６
直　　通　０１７－７３４－９４８５